

豊かな造形体験を活かし、自分らしい表現を追求する図画工作・美術科学習

— 思いをつかみ伝え合う中で思考力・判断力・表現力を育て高める —

1 図画工作・美術科で願う豊かな学びの姿

本学校の図画工作・美術科では、「豊かな造形体験を活かし、自分らしい表現を追求する図画工作・美術科」として、自分や他者の思いをつかみ、伝え合うかかわり合いの中で、より豊かな表現を追求していく授業づくりに取り組んできた。

授業後のふり返り（抜粋）

「ダンボールで」（小学3年 児童A）

今日は、図工でダンボールブロックをつなげました。はじめは、多めにとって組み合わせて選びました。選んだのはくねくねした海草を二つ重ねて、そこにタツノオトシゴをつけました。わたしは、タツノオトシゴが泳いでいると思ったけど、〇くんが「海草をタツノオトシゴが食べているようでおもしろい。」と言っていました。友だちに見せると、新しい発見があってよかったです。

「表じょう」（小学4年 児童B）

今日は、図工のつづきをしました。Iくんの絵は、とくちょうをいかして、すごいと思いました。みんなのも、パッと見ると、その人の表じょうがうかび上がってきます。

そのわけは、写真はそのままを写すだけだから、なにも気持ちがこもっていないけど、絵は、よさがたくさんあって、かく人は、よくよくかんさつして、こんな感じかな、こんな感じかなって思っ
てかいているから、かならずいい形ができるし、思ったことはたくさんあるので気持ちがこもって
います。

人によって思うことはさまざまだから、いろんな顔があるし、絵をかくのが苦手でも、十分気持
ちが入っているから、べつにうまくなくても、その人の顔をよく見ているかが、大事だと思いま
した。

児童Aは、くねる形を海草に見立て、そのイメージをもとに、複数のダンボールブロックの中から前景と背景になる海草のイメージに合った形を選び出し、組み合わせの試行錯誤をくり返しながらか、その間で戯れ遊ぶ海の生き物の場面を作るという構想を練っていった。意見や感想を交換し考えを共有し合ううちに、友だちのイメージをよいものとして感じ、自分の発想を発展させる手がかりとして取り入れていることが分かる。

児童Bは、製作途中の友だちの作品を鑑賞し味わう中で、描く人が表情を丁寧にとらえて形に表していることのよさに気づき、思いや感じ方の多様性が個性豊かな表し方を生み出しているとつかんでいる。

自分の表したいことをしっかりとらえ、感性をはたらかせながらイメージをふくらませると共に、友だちの取り組みからヒントを得て、自分の製作構想をまとめていこうとする姿が見られる。

子どもが必要感をもち、表したいと考えていることや、自分なりの表し方を見つけ出そうとする試行錯誤の活動を通して、色や形、または、そこから生じるイメージを言語に表し伝え合おうとするかかわりを、わかり合う場として保障し、教師がその活動の活性化を促すために意図的にはたらきかけることで、子どもの主体的な追求活動が展開し、子どもはさらに関心や意欲を高め、表したいことについての学び合いから手がかりをつかみ、必要なものやことについて思考し、判断して選択し、自らの造形表現をより豊かなものへと発展させていくであろう。感性をはたらかせる豊かな学びの場としての創造的な造形活動が拡がり、深まるであろう。

そこで具体的な「学びの姿」を次のように定義する。

○体験から感じ取り、体験を活かして自分らしい表し方（表現）を追求しようとする姿

○互いの考えを伝え合い、自分や仲間の表現を発展させようとする姿

幼小中の11年間一貫して大事にして育てていきたいこと

①表現力としての「体験したことを活かして自分らしい表し方を追求する力」

文部科学省から示されている「確かな学力」のひとつであり、自分の思いや欲求、願いなどを色や形に表すことを意味する。子ども一人ひとりがテーマをもち、用具や素材を選択活用し、自己実現の象徴としての作品を自分らしい表し方で平面や立体で表すことができる。このような子ども一人ひとりの必要感に応じた多様な表現が可能であることが図画工作・美術の教科性の特徴づけている。この豊かな表現力は時として言語表現を補ったり支えたりする。また、言語活動を拠り所として、より豊かな表現を生み出す活動が「鑑賞活動」である。

②鑑賞力としての「自分や友だちの取り組みや作品のよさを感じる力」

自分や友だちが造形表現する過程で見つけ出した表現のよさや、そのよさを支えている取り組みのよさを見つけ出す力である。そのよさは会話や文章などの言語活動によって伝わり共有されることを通して確認され、評価される。また、完成した作品から表現のすばらしさに気づいたり、背景にある伝統や文化、作者や時代の人々の生き方に触れたりすることができる。表現と一体化した「鑑賞活動」は言語活動と深い関わりをもち相互に補完する関係にある。

2 昨年度までの研究の経緯

(1) 子どもをとらえるという視点で取り組んだことからわかったこと

これまでの研究では、幼小中の11年間を見通した指導や題材の工夫をおこなってきた。18年度は幼小中一貫教育に向けて大切にしたいこととして、幼児期、小学校時期、中学校時期の子どもたちのくらしや学びをとらえ、それぞれの時期を円滑につなぐ共通の視点として、各学年の造形表現で出あわせたい「もの・こと」を「各学年の活動事例集」としてまとめている。昨年度は各領域と共通事項のから11年間を見通した「単元・題材配列一覧表」を作成し、題材の見直しや指導方法の工夫をおこなった。

昨年度の研究では、子どもをとらえるという視点を次のようにした。

①教育研究ブロックごとに思考力・判断力・表現力から子どもをとらえ、11年間の学びをつなぐ

②ものづくり構想に基づき、図画工作・美術科と技術科の学びの連結について、思考力・判断力・表現力の視点から明らかにする

(i) 体験したことから感じ取ったことや分かったことをもとに、直感的にまたは熟考して表したいことや課題につなげていくこと。

(ii) 表したいことや課題について、構想を立てて実践し、個人や集団で評価したり改善したりすること。

(iii) 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させ、それらを活用しながら表したいことや課題に向かうこと。

両教科に通じて、「見る」「聞く」「考える」「話す」力の基盤を、言語活動を通して育成することであり、児童・生徒相互のかかわり合いの力につながる資質や能力であると言える。また、直接的な言語表現に限らず、体験や活動の行為そのものを通して実感を伝える場合もある。

(2) 図画工作・美術としての思考力・判断力・表現力

「思考力」は、表現したいことにせまろうとする時、直感的にまたは論理的に言葉や図・イラスト等を使って物事を考える力である。また、言いたいことがはっきりしない場合など、色や形や図に表して整理しながら考えることがある。アイデアスケッチなどが例として考えられる。このとき、思考と表現と判断は一体化してはたらいっている。表現や鑑賞に関わって、直感的に感じたり、データに基づいて推測したり、情報を分析・評価・論述することも思考力がはたらく場であると言える。また、その場で働く力そのものが思考力であると言える。

「判断力」は、感性をはたらかせて対象と向き合った時、様々な直感や思考等による発想を通して、

自らのイメージを練り、表現することを決定する構想へとつながるものとしてはたらく力である。何かを鑑賞する時、美しいと感じたり興味を持ったりする力も感性的な判断力といえる。また、表したいものに合わせて材料や用具、手段や方法を適切に選択する力であり、鑑賞の場では色や形から意味を感じ取ったり、イメージしたことをもとに、表現の意図や作者の意図を読み取ったり、友だちの言葉のように自分にはたらきかけてくることに対して、理解したり、必要に応じて取捨選択したりする力であるといえる。

「表現力」は、形や色を通して自分が見たことや感じたことや表したいことを表す力であり、図画工作・美術ではこれまで特に強調されてきた能力であり、教科の特性を強く主張するところである。また、自分を表すことだけでなく、自分を他者や社会とつなぐ広義での「コミュニケーション能力」そのものであるといえる。

これらすべての能力は図画工作・美術では分断されることなく、一体化し、造形活動の中で自然にはたらいいていく力である。

(3) 思考力・判断力・表現力を育てるかかわり合い

図画工作・美術科では、思考力・判断力・表現力を育てるためには、追求過程において、子どもが主体的に自分を表現したり、互いを共感的に理解し合おうとしたりするわかり合いの場を子どもの必要感に配慮しながら、意図的、積極的に学習活動に位置づけていくことが大切であると考えている。子どもは自分の考えや追求の仕方などを積極的に表現し、伝えていくことができる。また、友だちのそれと比べながら、そのよさに気づき、そのよさを自分に取り込み、見直す中で、さらによりよい追求の仕方を見出したり、自分の考えを広げ、深めていったりできると考える。

体験から感じ取ったことを表現すること、課題について構想を立て、実践し、評価・改善すること、互いの考えを伝え合いかわり合うことで、自らの考えや集団の考えを発展させることにつながった。

3 本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力についての11年間のつながり

初等部前期	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもち、それを表す力仲間とともに造形遊びや表現活動する喜びを味わい、体全体の感覚をはたらかせて身近な素材や環境に触れ、よさや美しさを素直に感じ取るとともに、自分の願いや考えを自分なりの表し方で伝える力
初等部後期	所属する集団の中で色や形やイメージを基にして、表したいことについて関わり合い、自分の考えや意図を明らかにするとともに、仲間の考えなどを取り入れ、自己の造形表現の可能性を拡げる力
中等部	自分が集団や社会の一員であるという自覚のもと、集団や社会にはたらきかけることもできる造形表現の構想を持ち、その実現にむけて相互評価を取り入れ、習得した知識や技能を選択しながら造形表現したり、その造形表現を基に発信したりする力

(2) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

図画工作・美術の造形表現活動は、五感のはたらきと手のはたらきの連動によって常に変化と発展をくり返し進められていく。個人思考の視点で言えば、周囲の環境などの「場」や素材など「もの」とのかかわり合いの中で思考力・判断力・表現力は培われていく。また、イメージを拡げながら個人思考に基づいて試行錯誤を拡げるとともに、他者の表現活動やそれによる造形物との関わりの中で、発見や気付きを新たに獲得し、さらに創造性豊かな表現を求めていく。とり分け、子どもの世界では他者との深いかわり合いの中で獲得される経験は造形表現にも大きな影響を与える。なぜならば、個人思考と比べて、言語活動を伴う友だちとのコミュニケーションなどは、他者の経験を追体験したり、新たな気づきを獲得できたりするという点で、果たす役割とその効果が大変大きいからである。また、図画工作・

美術の特徴として指先や体全体を使って周囲の環境や材料や用具の体験をしながら、試行錯誤をくり返し、作りたいものにせまる活動は造形表現活動の基礎的・基本的な部分である。その上に立ち、相手に自分の意図を伝えるという活動を充実させていくことにより、自ずと自身の意図は明らかになり、新たな表現の可能性を発見するに至ると考える。さらに、個人思考では得難い経験が他者と深くかわり合うことによって蓄積され、思考力・判断力・表現力は相互に作用し、より効果的に高まり、培われていくと考える。

①学級全員で学び合う場面を大切に授業の枠組みを工夫する

新学習指導要領で述べられている「言語活動の充実(相互に評価、論述すること)」は図画工作・美術においても大事にしたい。「言語活動」を通じて思考力・判断力・表現力等の育成を考える時、図画工作・美術では表現や鑑賞の学習活動の中では、「見る」「聞く」「考える」「話す」力の基盤について言語活動を通して育成することである。また、図画工作・美術での「話す」事に関しては、漠然としていることを色や形を手かがりにして、また、([共通事項]に関わって)図やイラストに整理しながら、または、動作を伴って伝えるという事があり、その行為によって次第に考えがまとまったり、新たな発見を得たり、言葉以上に意図が伝わったりすることがある。

造形体験や試行錯誤の活動から見出された一人ひとりの考えや追求の仕方を、学級全体の場に出し合い、共通の視点に基づいてその造形表現のよさや追求の仕方のよさを学び合う。また、子どもたちが出し合い、学び合うことで、自らの追求の深め、意欲を高める中で見出したよさを、子ども一人ひとりが自身の造形表現に取り込むことができるように、整理し、広げたり、深めたりできるような工夫を教師のはたらきかけとして行う。

表現と鑑賞の活動の中で、題材や活動をもう一度見直し、児童が友だちと関わる場面や教師が児童とかわり合う場面において、はたらきかけたりまかせたりするねらいを明確に位置づけることが大切であると考える。

体験から感じ取ったことを表現すること、課題について構想を立て、実践し、評価・改善すること、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させることを、学習活動の中に明確に位置づけて展開させていきたい。

② 教師のはたらきかけのあり方

(i) 互いの造形表現のよさ追求の仕方のよさを伝え合い、学びを深めたり広げたりする「わかり合いの場」を工夫する。

(ii) 自分の追求の深まりや広がり気づかせ、以後の学習やくらしにつなげていくようにする「ふりかえりの場」を工夫する。

(iii) 「わかり合う場」と「ふりかえりの場」を連動させることにより、主体的な学びの姿を自覚させる。

子どもが互いのよさを認め合い、自分の造形表現に生かすことで、子どもが互いの学びをつなぐこと。また、その学び合いの中で、子どもが連続した自分の造形表現の過程で、試し、見直し、工夫改善し、次の造形表現に発展させるといった、自らの学びにつなぐことができるようにする。

そのために、子どもの主体的な学びにまかせきるのではなく、時に、子どもが表そうとしている造形表現について背景を問いかけたり、考えを掘り起こしたりすることで、表したいことを確かめたり、その他の可能性に気づかせたりする。子どもの学びのよさを認めたり、作品を見る視点を提案したりするなど、適切にはたらきかけることにより、子どもの感性をゆさぶり、より深く考えたり、多角的に視点を広げることができるように、一人ひとりの学びの場や学級全体で学び合う場を活性化させる工夫をしたい。

(文責 三桐 撰夫)